



森本利通ステップス初個展である。同時に、森本 34 年振りの銀座における個展でもある。森本が 75 年にシェル美術賞展に入賞したこと、79 年の図書新聞一面に記事が掲載され当時注目されていたこと、30 年ぶりに復帰して、現在のモチーフである球体は何かといった考察を、私はリーフレットに書いたのです是非とも手にとって戴きたい。

森本は今回、《心象》1-6(紙にアクリル/91×200cm(1,5,6)/85×200cm(2,3,4))という六点を出品した。この展覧会は一週間前の 14-19 日まで、横浜・ギャラリーパリで開催された同展覧会の巡回である。凡そ 12.5×7m の広さを持つギャラリーパリではゆったりと展示し、窓を開けて外光を取り入れ、1 点 1 点に集中できる展示が為されていた。

ステップスギャラリーの吉岡は、凡そ 6×3.5m というギャラリーパリの半分の壁面の一面を使わずに、最も長い壁に 3 点、次に長い壁に 2 点、最も短い壁に 1 点の作品を展示した。私はギャラリーパリの展示も見たので感じたことではあるのだが、森本の作品が持つイメージの拡散と凝縮を体験することが出来た。

ステップスの展示のみを見ると、同じように見える六枚の作品は、その制作意図、動機、方法が全く異なることを比較検討することが可能だ。プロトタイプがあり、それをヴァリエーションすることなく、個々の作品一つ一つが自立している。それでも作品は一つの意志に貫かれている。それが人間の人生であり、現代美術の在り方なのだろう。

